

「螺旋のエンペロイダー Spin3.」誤植のお詫びと訂正

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

2015 年 12 月 10 日発売となりました「螺旋のエンペロイダー Spin3.」の 275 ページにおいて、制作工程上の問題から誤植（文章の重複、抜け落ち）が発生したことが判明いたしました。

【誤】

- ・ 275 ページ 1 行目の本文が、274 ページ 17 行目（最終行）の本文と重複している。
- ・ 275 ページ 17 行目から 278 ページにまたがって入るはずの本文

真っ白い顔をした咲桜が、虚宇介の肩を後ろからぐいっ、と掴んだ。そして——引っ張り込んだ。

の一部が抜け落ちている。

謹んでお詫びさせていただきますとともに、正しいページの PDF ファイルを配布させていただきます。

関係者各位、並びに読者の皆様にご迷惑をお掛け致しましたことを、ここに訂正するとともに深くお詫び申し上げます。

2015 年 12 月 15 日
株式会社 KADOKAWA
電撃文庫編集部

空間の中から、ぬうつ、と白いものが浮かび上がるようにして現れた。洞窟^{どうくつ}から外に出てくる様子に似ていた。

その白いもの——それを迅八郎は知っていた。

だが、信じられなかった。

「え——」

彼はこれほどの動乱の中にあつてさえ、それ以外のすべてのことを一瞬、忘れた。そんな馬鹿^{ばか}な、と思った。その白いものは——人だった。才牙虚宇介が創ったはずの影から、まったくの別人が顔を出した。

「……………」

その人物——少女の顔色は真っ白だった。そこは迅八郎の記憶とは異なっていた。しかし知っている。見間違ひようがない。その少女と迅八郎は、ついこの前まで同じクラスで席を並べて共に学んで、競い合っていた相手だったからだ。

「……志邑咲桜……?」

だが、そんなまさか——彼女は既に死んでいるはずだ。少なくとも彼はそう確信していた。しかし今、それが目の前にいる——。

「——」

真っ白い顔をした咲桜が、虚宇介の肩を後ろからぐいつ、と掴^{つか}んだ。そして——引っ張り込